

## 第七講 帝国スパルタが抱える問題

### 1. キナドンの陰謀（前 398 年）

スパルティアタイ（スパルタ市民）は少数派支配者層

ホモイオイ＝スパルティアタイ

キナドンはホモイオイではなく、誰にも負けたくはないという強い自尊心の持ち主。

非支配者としてヘイロタイ、ネオダモデイス、ヒュポメイオネス、ペリオイコイの諸身分が挙げられる。

アゴラにいた人々のうちスパルティアタイは僅か 40 名。それ以外の人々は 4000 名。1%。

スパルティアタイに対する激しい敵意（「生肉を食らう」と表現）の存在。

#### Xen. *Hell.* 3. 3. 5:

「この人物は外見からして若者であり、頑強な精神の持ち主であったが、ホモイオイの一員ではなかった。それでエフォロスたちがその企てがどのようなものなのかについて彼が語ったことについて質問すると、その通報者はキナドンが自分をアゴラの端に連れていき、アゴラの中にどれくらいのスパルティアタイが居るのかを数えるように命じたのです。それで私は王やエフォロスたち、長老会の議員たちやその他の者たちを 40 名ばかりを数え上げて、尋ねました。キナドンよ、どうして数えるよう命じるのですか。すると彼はこう答えました。これらの者たちは君にとって敵であり、アゴラに居る 4000 名以上のその他の人々の全てが味方だと看做したまえと、彼は言いました。そして道で出会う人を、こちらで一人、あちらで二人と指さしながら全てが敵であり残り的人すべてが味方だと私に言いました。たまたまスパルティアタイの所領にいたとしても、敵は主人一人であり、そこに居る多くのものが味方なのだ。」

#### Xen. *Hell.* 3. 3. 6:

「それでエフォロスたちがどれくらいの数が行為に通じていると彼

が言っていたのかと問い質すと、そのことについて彼はそのような指導者となる人々は決して多くはないが、信頼に足る人々が通じていると彼が言ったと述べたのである。そのような人々は全てのヘイロタイやネオダモデイス、ヒュポメイオネス、それにペリオイコイに通じている。これらの人々においてスパルティアタイについて議論される時には、誰も喜んで彼らを生で食ってしまえるのだということを隠しておくことはできないのだと。」

Xen. *Hell.* 3. 3. 11:

「この男が捕縛され、キナドンが書き出した名簿を携えて騎士が戻ってくると、直ちに預言者のティサメノスやその他の重要人物を彼らは逮捕したのであった。キナドンは連行されて尋問を受けると、全てを認め、共犯者を自白したが、最後に彼らは彼が何故このようなことを行おうと望んだのかを尋ねたのであった。ラケダイモンにおいて誰にも負けたくないのだと彼は答えたのであった。この後、彼と彼の仲間たちは手枷首枷をはめられ鞭打たれながら市中を引き回された。そのような判決を彼らは受けたのであった。」

## 2. オリガントロピア（市民人口過少）

一般に前4世紀のスパルタは市民人口の過剰な減少に悩まされていたと言われている。

Arist. *Pol.* 1270a 35-39:

「それ故その地は1500騎の騎兵、1000名ではなく、30000名もの規模の重装歩兵を養うことができたのである。彼らのそのような取り決め（贈与および遺贈の自由のこと：訳者）が彼らには有害であったことは結果そのものによって明らかとなった。というのはたったひとつの敗北によってそのポリスが衰退したのではなく、人口過少（オリガントロピア）によって壊滅してしまったのだ。かつての王たちの時代には市民権を分ち合い、長年にわたって戦争をしていたけれど、人口過少ではなかったと人々は言っ

ており、かつてスパルティアタイは一万人もいたと言っている。それにも拘わらず、それが事実であれ事実でないということであれ、ポリスが財産を平等にすることによって人口を増やすほうが優れている。しかし出産に関する法律はそれとは反対の処遇である。」

- ・ ペルシア戦争当時、スパルタは市民兵が 5000 名、ペリオイコイ兵が 5000 名、ヘイロタイ兵が 35000 名と伝えられている (Hdt. 9. 28)。

- ・ 前 425 年のスファクテリア島の戦いで捕虜となったラケダイモン兵 292 名のうちスパルタ市民兵は 120 名であった (Thuc. 4. 38. 5)。その比率は 41%。

エピタダス指揮下の 420 名 (Thuc. 4. 8)

生き残り 292 名、スパルタ人約 120 名 (Thuc. 4. 38)

→ 6 分の 4

→ 2870 名程度

- ・ 前 418 年のマンティネイアの戦いの時、スパルタは全軍の 6 分の 5、 $448 \text{ 名} \times 8 \text{ 列} = 3584 \text{ 名}$  (Thuc. 5. 68. 2. Cf. 64. 3)。本国に後送された 6 分の 1 を加算すると、全軍で 4300 名になるが、市民兵の数は分からない。スファクテリア島の捕虜の比率を仮に当てはめるとすればスパルタ市民兵の総数は 1763 名。

ラケダイモン軍 (スキリティス部隊を含む : 前 418 年)

Thuc. 5. 64. 2-3: 市民と農奴の総兵力

6 分の 1 (716 名) を本国に返す = 4300 名

大隊にはスパルタ市民兵、ペリオイコイ兵、新市民兵、ブラシダス従軍兵が含まれる。

Thuc. 5. 68. 3:  $448 \text{ 名} \times 8 \text{ 列} + 700 \text{ 名} = 3584 \text{ 名} + 700 \text{ 名} = 4284 \text{ 名}$

ブラシダス従軍兵、ネオダモデイス兵、ラケダイモン兵 (スパルタ市民兵 + ペリオイコイ兵)

7 個大隊 ( $64 \text{ 名} \times 8 \text{ 列} = 512 \text{ 名} \times 7 \text{ 個大隊} = 3584 \text{ 名}$ )

ペリオイコイ兵の数が分からないのでスパルタ市民兵の数は分からない。

マンティネイア遠征軍の総体がスパルタ市民兵のみから構成されていたと想定するのは問題がある。

**Thuc. 5. 64. 2 :**

「その報に接してラケダイモン人は彼ら自身並びにヘイロタイ全員を擁して直ちに援軍を動員した。」

**Thuc. 5. 64. 3:**

「彼らはマイナリア地方のオレスティオンへと前進したのである。彼ら自身のアルカディアの同盟諸国に兵を集めて陸路テゲアへと向かうように命じ、自身はオレスティオンまで全軍で向かったのであるが、本国を防衛するためにその地から自軍の、老年兵と若年兵から成る、六分の一を本国へ送り返し、残りの部隊はテゲアに到着した。そしてその後ほどなくアルカディアの同盟諸国軍が到着したのであった。」

**Thuc. 5. 67. 1 :**

「左翼をスキリタイ人が占めたが、それは常にラケダイモン人の中で彼らのみがその位置を占拠することになっていたからである、彼らの隣にはトラキアから帰還したブラシデイオイの部隊とネオダモデイスが、さらにラケダイモン人本隊が諸ロコス（大隊）を配備し、彼らの隣にアルカディアのヘライア人、その隣にマイナリア人、右翼をテゲア人がそして最右翼を少数のラケダイモン人が占めた。さらに彼らの騎兵部隊が両翼に位置した。」

**Thuc. 5. 68. 3 :**

「というのは600名から成るスキリティス人を除いて7個のロコス(大隊)が戦闘に加わったが、各ロコスに4個のペンテコステュス(五十人隊)、各ペンテコステュスには4個のエノモティア(小隊)があった。エノモテ

ィアの内4名が第一戦列で戦った。奥行きに関しては全てが同じ配列ではなく、それぞれのロカゴス（大隊長）が望んだように、全体としては8列で配置したのであった。スキリティス人を除いて第一戦列は448名であった。」

Cf. フォレスト（1990）：マンティネイアの戦い当時のスパルタ市民兵の総数2500名又は3360名（210）。

- ・ 前371年のレウクトラの戦い。

戦闘に参加したラケダイモン軍は第35年次兵までの4箇モラー。

スパルタ市民兵は700名。

本国に2箇モラーが後置されていたと伝えられているので、単純計算で第35年次兵までのスパルタ市民兵の数は1050名。それに第35年次兵以上の老年兵や役職者を加算しなければならないので、仮に1200名がスパルタ市民の総数と想定する。

一般に、モラーの規模を600名と想定しているので、ラケダイモン全体としては3600名。スパルタ市民兵の比率はおよそ40%。この比率はスファクテリア島での捕虜の比率に近似している。

ラケダイモン兵の戦死者1000名

スパルタ市民兵700名のうち400名が戦死（*Xen. Hell.* 6. 4. 15）

→5分の2

1050名程度（戦場へは6分の4を投入と推定

←ピュロスと同じ比率）

*Xen. Hell.* 6. 1. 1:

「さてアテナイ人とラケダイモン人は以上のものであった。他方テーバイ人はボイオティアにある諸ポリスを制圧するや、フォーキスに遠征したのである。それでフォーキス人はラケダイモンに使節を派遣し、もし援軍を派遣しないのであればテーバイ人への屈服を抗うことはできないと述べ、その為に王のクレオンプロトスと4箇モラー（大隊）及び同盟諸国軍を海

路フォーキスへと輸送したのである。」

Xen. *Hell.* 6. 4. 15:

「ポレマルコスたちは、ラケダイモン人部隊全体ではほぼ 1000 名が戦死し、スパルティアタイ自身のうち、そこに 700 名ばかり居たが、およそ 400 名が戦死してしまったのを目にし、同盟諸国軍の全てが戦う気がなく、彼らのある者たちは起きたことに不快を感じていないことを知ると、軍の最高幹部たちを招集して何を為すべきかについて相談したのである。全員が休戦協定を結んで死体を収容すべしと決定したので、それで彼らはこのようにして伝令を協定のために派遣したのであった。テーバイ人たちは勿論その後戦勝記念碑を建立し休戦協定を締結して死体を引き渡したのであった。」

Xen. *Hell.* 6. 4. 17:

「その後エフォロスたちは初年次兵（18 歳）から第 40 年次兵（58 歳）までの残りの 2 個モラー（大隊）に出動を命じた。また国外にいたモラーから同じ年次兵までの者たちを送り出したのであった。というのは以前フォーキスへは初年次兵から第 35 年次兵（53 歳）までが出征したからである。加えて役職に就いていたために後方に残されていた人々を一緒に出征するよう命じたのであった。」

マンティネイアの戦いからレウクトラの戦いまでの 47 年間に、ラケダイモン全体としては 700 名、16%の減少、スパルタ市民兵に関しては 563 名、32%も減少していることになる。スパルタ市民兵の減少がラケダイモン全体の減少の原因であることを示している。

Cf. フォレスト（1990）：2550 名（レウクトラに参加したスパルタ市民兵 1700 名（210））。

それに対する対応としてスパルタ市民兵とペリオイコイ兵との混成部

隊編成の採用。ブラシデイオイやネオダモデイスなどのヘイロタイ解放兵の活用。

【参考文献】

- P. Cartledge (2002), *Sparta and Lakonia: a regional History 1300 to 362 BC.*, London/ New York.
- E. David (1979), "The Conspiracy of Cinadon". *Athenæum* 57, 239–259.
- W. G. Forrest (1968), *A History of Sparta 950- 192 BC.*, London.
- S. Hodokinson (1989), "Inheritance, Marriage and Demography: Perspectives upon the Success and Decline of Classical Sparta", in A. Powell (ed.), *Classical Sparta: Techniques behind her Success*, London, 79-121.
- A. H. M. Jones (1968), *Sparta*, Oxford.
- J. F. Lazenby (1977), "The Conspiracy of Cinadon reconsidered". *Athenæum* 55, 437–443.
- E. Lévy (2003). *Sparte : histoire politique et sociale jusqu'à la conquête romaine*. Seuil, "Points Histoire" collection, Paris.
- G. Shipley (2004), "Lakedaimon", in M. H. Hansen & Th. H. Nielsen (eds.) *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford/ New York.
- R. Vattone (1982), "Problemi spartani. La congiura di Cinadone". *RSA* 12, 19–52.
- 太田秀通、『東地中海世界』、岩波書店、126-170。
- W. G. フォレスト (丹藤浩二 訳) (1990)、『スパルタ史』、溪水社。